MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１２．２２　発行元
第 429 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

アガサ・クリスティの代表作

アガサ・クリスティの代表作。これはミステリの歴史の中での記念碑みたいなものである。それ以降の作品の中で引き合いに出される機会は非常に多い。今もって全世界で読まれ続けている作家のひとりである。

『そして誰もいなくなった』が群を抜く

日本のミステリを読んでいても『そして誰もいなくなった』を意識して書かれただろうと思われる作品の数は多い。「館もの」であり、連続殺人であり、そし最後には…となる物語構成は、ミステリ作家の究極の目標に近いのかもしれない。今私のこの原稿を読んでいるくらいの人は当然のごとく既読だろうと思うのだが…。

クリスティの代表作。シリーズものではないけれども、『そして誰もいなくなった』がトップに。次はポワロものということで『オリエント急行の殺人』。『アクロイド殺害事件』も有名だが、ミステリの完成度は『オリエント』だ。少し後の作品では『ナイルに死す』と『白昼の悪魔』がお気に入り。次の回にでも取り上げることにしよう。

ミス・マーブルものの中からは一番スタートの『ミス・マーブルと１３の謎』を選んだ。この短編集はミス・マーブルの特徴がよく出ている作品だと思う。

図書館へ行くとハヤカワ文庫版のクリスティ全集が揃っているところが多いので、どの作品も簡単に手に取ることが可能なはず。未読の人は是非お読みください。

NO.3『ミス・マーブルと 13 の謎』

１９３２年。創元推理文庫版の題名が『ミス・マーブルと１３の謎』。ハヤカワ版では『火曜クラブ』になっている。ミス・マーブル初登場の作品。セント・メアリ・ミード村。ミス・マーブルとその甥に当たる小説家のレイモンド。そこへ画家のジョイス、前警視総監のサー・ヘンリー、ベンダー牧師、ペザリック弁護士が加わって、話し手だけが結末を知っている迷宮入りに近い事件を検討する集まりが開かれることに。それが「火曜クラブ」。（後半はメンバーに移動がある）　参加者同士で意見を述べあうのだが、最初は単なる見守り役に見えたミス・マーブルが思いがけない推理を展開して見せる。人生経験に裏打ちされた言葉に参加者は皆舌を巻くことに…。

NO.1『そして誰もいなくなった』

１９３９年。あまりにも有名な…。クリスティ中期の作品に当たる。私の手元にあるのはハヤカワ・ポケットミステリの１９６番。１９７５年の２刷である。長編としては短い方。でも中身は充実している。よくわからないうちに一気に読み進むのが良いのかも…。

ヨット好きのアメリカの富豪がデヴァン州にあるインディアン島を買い取り贅沢な邸宅を建設。その後売りに出したところオーエンなる未知の人物が買い取ったニュースが流れた。そのインディアン島に１０人が集められるのがスタート。オーエンからの招待状をもらつた人達や雇われた人達。スティングルヘヴンの海岸から皆船に乗り島へ。島の大邸宅に到着すると、オーエン氏は今日は来れないのでゆっくりするようにとの伝言が召使から聞かされる。夕食のテーブルにつくと中央に１０人の陶器製のインディアンの人形が。各部屋には古いインディアンの子守唄の詩が額が掲げられている。食後の珈琲を飲む時間に不思議な声が流れ始める。「諸君はそれぞれ次にのべる罪状で殺人の嫌疑をうけている…」。そして一人一人身に覚えのある事件が話され…。そして孤島での惨劇が展開されていく。子守唄の詩に合わせるかのように…。最後は、そして誰も…。

No.2『オリエント急行の殺人』

１９３４年。これもまたあまりにも有名な…。意外な犯人設定でしばしば引用されることに。ポワロものの一作。何より「オリエント急行」という舞台が素晴らしい。鉄道ミステリであり、各国の乗客が乗り合わせて、国際色豊かに話が盛り上がるところが良い。

探偵のエルキュール・ポワロはシリアでの事件を片づけた後トルコのスタンブールへ。そこで２、３日観光でもしようと考えていたところ、イギリスから早急に帰るように電報が届く。しかたなくシンプロン・オリエント急行の寝台切符を確保しようとしたところ満室とのこと。冬季の今頃はガラガラなはずなのに不思議な現象。無理を言って潜り込んだが、ユーゴスラビアまで来たところで雪だまりに突っ込んで立往生。そして、事件が。アメリカの老富豪ラチェット氏が部屋で刺殺体で発見された。ポワロはこのラチェット氏から少し前に仕事を頼みたいと依頼を受け、断ったばかりだった。事件の解明に向け動き出すポワロ。いろんな国のいろんな年齢層の関係者に話を聞いていくが、すべての人にアリバイが成り立ちそうな様相。一番のポイントは遺体に１２箇所もの傷があることで、その数の多さに納得がいかないことであった。さて、その解決は…。